



馬耳東風

コロナ流行の折り、身の回りの片づけに勤しむ友が多い。私も友に倣って衣類や本の整理をしようと何度か挑戦しているが全く進まない。決してケチな性分ではないと思うのだが、まだ十分に着られる衣類をひもで縛ってゴミとして捨てることに強い抵抗感がある。「もったいない」という言葉を聞かされながら育った年代だからだろうか。本の場合は、捨てると思うが内容に記憶がないので確かめようと拾い読みしているうちに読み始めてしまい一向に片付かない。もう数カ月が経過しているというのに衣類も本もそれぞれ段ボール箱2個分くらいが整理できただけである。しかし机の引き出しだけは完璧に片付いた。

昔タバコを吸っていた頃、ライターよりマッチを愛用していたので喫茶店では必ずマッチを頂くようにしていたが、当時のマッチの空き箱が一つ、引き出しの奥から出てきた。名前は有名だが絵はあまり知られていない画家の名前を冠したその喫茶店は、当時通っていた大学前の通り沿いにあった。間口はさして広くないが奥行きがあり、中ほどに植栽があった。店内には暗い色調のその画家の絵が沢山飾られていた。ゆったりとした空間で調度はソファではなく木製のテーブルと椅子で、喫茶店というよりはレストランのようであった。ここではコーヒーの他にセイロン風カレーというのが供されていた。カレーの皿とは別に、小さく刻まれたラッキョウと福神漬けがしゃれたガラス製の容器に入れられ、小さなトンダとともに出てきた。そして食事が終わるとデミタスカップのコーヒーが出された。いつ行ってもあまり混んでおらず、ここではゆったりとした時間を過ごすことが

でき、当時の私には唯一の癒しの空間だった。私はいつも一人で行っていたが、奥では数人のグループが読書会をやっているのをよく見かけたものだ。その店がある時同じ通りの別の場所に移転した。店は狭くなり雰囲気がすっかり変わってしまったので、次第に足が遠のいてしまったのであるが、おそらく最後に行った時のマッチだと思われた。移転の理由はわからないが、あのような客本位の営業形態が、世の中の忙しい流れに合わなくなってきたのだろう。

喫茶店といえばもう一軒、こちらは今でも時々立ち寄る店がある。神田の古本屋街の裏通りにあるこの店は、上記の店と異なり店内は狭くいつも音楽が流れているのだが、その音楽というのがタンゴ、それもアルゼンチンタンゴだけであり、しかも音源はレコードなのである。客はマニアックな人たちばかりと思うかも知れないが、察するところ私のようなごく普通の人たちである。私は古本屋巡りで疲れた足を休めるため、最後はこの喫茶店に立ち寄り一時を過ごす。この店はいつの頃からかコーヒーの他に世界のビールを置くようになったが、狭い店内のどこにストックしてあるのだろうと訝るほどたくさん種類がある。まずはビールで渴いた喉を潤し、次いでコーヒーを頼んで、買い込んだ古本のページをばらばらとめくるとというのが私のささやかな楽しみの一つだったのだが、ここ数カ月ご無沙汰である。外出を自粛せざるを得ない日が続いてみると、あの平々凡々とした日常の中のたまの外出がいかに貴重であったか思い知らされている。一刻も早く、古本屋街の喫茶店でメキシコのコロナビールを飲んで「コロナ退治」といきたいものだ。そのあと、もう長い間行っていないあの喫茶店へ廻ってセイロンカレーを食べよう。(久)